

弥生時代のはじまりと展開 ～古墳出現前夜の様相～

平成17年3月31日発行

狛江市和泉本町1-1-5

電話 (3430)1111

I 弥生文化の形成

今から約2,300年ほど前、日本列島ではそれまで約1万年以上にわたって続いてきた採集狩猟主体の生活(縄文文化)に大きな変化がもたらされました。本格的な水稻農耕の技術、鉄器や青銅器など金属器の製作と使用方法、機織技術など、縄文文化には見られない様々な技術が、中国大陸・朝鮮半島から日本列島に伝わってきました。弥生時代の幕開けです。

一方で、弥生時代に入っても、人々は縄文時代と同様、地面を掘り窪めた竪穴住居で生活しましたし、採集・狩猟活動をやめてしまったわけではありません。弥生土器も縄文土器の製作技術の伝統上に発展した素焼きの土器です。また、近年では縄文時代にすでに簡単な植物栽培が行われていたことも分かってきました。このように、弥生文化はもともと日本列島に展開していた縄文文化を土台として、大陸からの新しい文化要素を一部取り込んで成立した文化なのです。

大陸からもたらされた水稻耕作などの新たな文化要素はまず九州北部に伝わり、それが次第に瀬戸内地方、近畿地方へというように西日本一帯に広がり、その後東日本各地へと広まりました。なかでも東北地方には日本海側を経ていち早く伝わり、弥生時代前期の水田跡も発見されていますが、寒冷な気候からか、その後稲作技術は定着しなかったようです。関東地方において本格的な稲作が開始されるのは、弥生時代も中期後半以降になってからと考えられます。弥生文化の幕開けは、日本列島全体で一様ではなく、またその文化内容も、各地域においてその基盤となった縄文文化の地域的特徴とその後の新しい文化要素の受け入れ具合の差などから、様々な地域性が認められます。

II 埴上遺跡出土の条痕文土器と弥生時代の始まり

^{いりうえ}埴上遺跡から出土した^{じょうこんもん}条痕文土器は、縄文時代晩期の終末から弥生時代の中頃に位置付けられる土器のひとつです。西日本がいち早く弥生文化へ移行した際に、これに抵抗するかのように伊勢湾沿岸を中心に条痕文土器の文化圏が形成されます。東海地方の条痕文土器は、二枚貝の貝殻の縁で土器の表面を撫でて調整したのですが、その影響を受けたとされる中部・関東地方に広がる条痕文土器の多くは、植物の茎を束ねたような軟らかい工具で撫で付けたものが主体となります。関東地方や中部地方における縄文文化から弥生文化への変遷過程を考えていく際には、これら条痕文土器が東海地方の条痕文土器の系譜につながるものなのか、あるいは地元の縄文土器の伝統上に出現するものなのか、さらにはこれら条痕文土器の使われた時期を縄文時代に含めるのか弥生時代に含めるのかといった点で意見が分かれるところです。

ところで、埴上遺跡ではこれよりやや古い縄文時代晩期の住居跡1軒が見つかっています。縄文時代といっても、中期・後期の住居跡はいままでたくさん見つかっていますが、晩期の住居跡の発見例は非常に少なく貴重な事例です。多摩川中～下流域では調布市下布田遺跡でほぼ同時期の配石遺構が見ついているほか、下流の大田区^{しもぬまべ}下沼部遺跡でややまとまった量の土器が見つかっているに過ぎません。

また縄文晩期の遺跡分布を観察すると、縄文時代中・後期の集落が主に台地上の広い平坦面上を中心に展開していたのに対して、段丘の縁近くに移動していった様子が窺えることから、弥生文化の伝来に先立って、自然環境や生業活動のあり方など人々の生活に何らかの変化が起こったことが想定できます。

Ⅲ 弥生時代後期の集落

関東地方においては、鶴見川流域や荒川流域において、中期半ばに入り本格的な集落が営まれるようになりますが、神田川流域や多摩川流域では後期に入ってからようやく集落が営まれるようになります。

狛江市内においては、旧岩戸川の流れを南に望む古屋敷・相之原遺跡と、そのほぼ対岸にあたる矢崎山遺跡、旧野川と清水川の合流点に挟まれた和泉駄倉遺跡などで集落跡が見つっています。また上遺跡においても住居跡1軒が調査されています。これら弥生時代の集落跡の立地条件を見ると、河川沿いの沖積低地を望むような段丘の縁辺部、あるいは低位台地上に立地していることが分かります。

古屋敷・相之原遺跡では、これまでに7軒以上の住居跡が見つかり、隣接する世田谷区側へと続く大規模な集落跡であったものと考えられます。このなかには長軸が10メートルを超える大形の住居が数軒含まれています。矢崎山遺跡では住居跡1軒が調査されただけですが、長軸9.7メートルを測る大規模な住居でした。和泉駄倉遺跡では長軸7メートル以上の住居3軒が検出されており、うち1軒は9メートルを測る大規模な住居でした。このように、弥生時代後期の集落では、規模が極端に大きな住居が出現するようになりますが、集団内に何らかの身分的あるいは役割的な差が生まれてきた結果と考えられます。

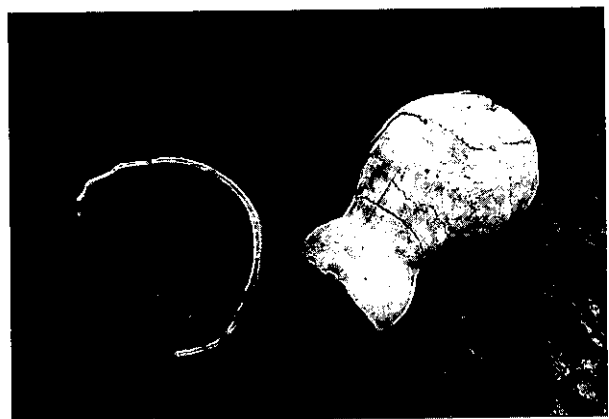
Ⅳ 方形周溝墓の出現

弥生時代の終末に近くなると、^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓と呼ばれる墓が出現するようになります。これは、墓の埋葬部を中心にしてまわりを方形の溝で取り囲んだ墓です。方形周溝墓の出現は、集団の中において、特別な墓に埋葬されるような指導者的な人物が登場したことを物語っています。西日本各地においては、弥生時代前期末葉に早くも登場しますが、関東地方では中期後半に至り登場し、本格的に構築されるようになるのは、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期となります。発掘調査では、遺体を埋葬した主体部とそれを取り囲む溝だけが検出されることが多いのですが、本来は低い盛土（マウンド）を持っていたものと考えられており、後に展開する古墳の^{ほうが}萌芽的な形態と言えます。

狛江市内では、弁財天池遺跡において一辺が18メートルに及ぶ方形周溝墓が調査されているほか、上北遺跡、^{みつおきにし}三長西遺跡で各1基が見つっています。いずれも、水田が営まれていたであろう沖積低地を望む台地の縁辺近くに該当することが注意されます。なかでも、弁財天池遺跡の方形周溝墓では2基の主体部が調査され、^{どうくしろ}銅釧（銅製の腕輪）6点が腕に装着されたような状況で出土しているほか、鉄釧、槍先形鉄製品なども出土しました。この方形周溝墓の規模や副葬品の質から、被葬者は当地域を含む共同体の盟主的な者と推定でき、後に狛江古墳群をかたちづくる共同体の初現的な様相を示しているようです。



弁財天池遺跡から発見された方形周溝墓



和泉駄倉遺跡5号住居跡の弥生土器出土状況